

第22回

SDGsと平和

— 太平洋戦争の激戦地、パラオから

行方市SDGs推進アドバイザー・茨城大学教授 野田 真里

1. 平和は持続可能な開発・SDGsと密接不可分

私事で恐縮ですが、研究のため、この7〜8月に太平洋に浮かぶ人口約1万8000人の小島嶼国、パラオ共和国を訪問しました。SDGsにおいて持続可能な開発と密接不可分な平和について、深く考える機会をいただきました。新型コロナウイルス禍以降、初めての海外出張でしたが、ワクチン接種証明やPCR検査等、万全の準備で問題なく渡航できました。

SDGsの目標16では、「持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する」と述べられています。また、SDGsを含む『2030アジェンダ』においても、その要点をまとめた「5つのP」の一つに平和(Peace)が挙げられ、「我々は、恐

怖及び暴力から自由であり・・・平和なくしては持続可能な開発はあり得ず、持続可能な開発なくして平和もあり得ない」とあります。

2. 日本とご縁の深いパラオ

パラオは、日本とご縁の深い国です。第1次世界大戦後、1919年のヴェルサイユ条約によって、日本は南洋群島を委任統治し、現在のパラオのロール島に南洋庁を置きました。南洋群島は、現在のパラオをはじめ、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島等を指します。日本から南洋興発等の企業が進出、水産業やリン鉱石の採掘にあたり、日本からの移民も多く、国民学校等も開設されました。また、パラオの人々のために社会基盤や教育、保健医療等の整備もなされました。

現在でも日本とパラオの関係は深く、友好的です。「日本・パラオ友好の橋」(最大の都市ロール島

と、空港や首都があるバベルダオブ島を結ぶ)をはじめ、日本の国際協力はパラオの持続可能な開発に貢献しています。パラオ語には日本語の語彙がたくさん残っています(例えば、弁当はBentoです)。日系の方も多く、クニオ・ナカムラ元大統領のご尊父は、私の故郷である三重県のご出身です。三重県とパラオは四半世紀もの国際交流を続けており、私もご協力させていただいております。

3. ペリリュー島と水戸歩兵第二連隊、茨城大学―我が事としての戦争と平和

パラオの中でも、茨城県そして、茨城大学とも特にご縁が深いのが、太平洋戦争の激戦地であったペリリュー島で、初めて現地を訪問して、言葉にならない感銘を受けました。ペリリュー島はロール島から高速船で1時間以上の離島ですが、地政学的に非常に重要で、十字に伸びる滑走路は東洋一とされています。戦後70年にあたる2015年4月、当時の天皇・皇后両陛下がご訪問、ペリリュー平和公園にて慰霊と平和祈念をなされました(写真)。

このペリリュー島の守備隊の中心が、陸軍の水戸第二歩兵連隊で、多くの兵士が茨城県(含、行方)のご出身、兵営は現在の本学水戸キャンパスにありました。ペリリュー島の戦い(1944年9〜11月)では、守備隊約1万人の大半が戦死されました(生還者はわずか34名)。本学水戸キャンパスと同じ場所から、私が教えている学生と変わらない20代の多くの茨城出身の若者が戦地に向かい、本学学生数(約9000人)を超える方々が非業の最期を迎えられました。太平洋を臨みながら、戦争は他人事ではない、我が事であり、平和と持続可能な開発の重要性を深く心に刻みました。



▲「西太平洋戦没者の碑」。中央のレリーフは半眼で、日本を見つめている(筆者撮影)